

おごせ 教育 Pick Up

越生小学校



6月27日に越生小と梅園小の1年生が合同交流事業で外国語活動を通して交流を深めました。この取組は、全学年が年間を通じて複数回、行事等を通して交流します。毎年経験を積み重ね中学校で再び一緒に学びます。

梅園小学校

6月17日の梅干しづくり体験教室では、1～3年生が講師の宮崎さん、立川さんの指導のもと、保護者の方にも手伝ってもらいながら、梅を洗ったり、へたを竹串で取り除いたりしました。体験の様子は、テレビや新聞で紹介されました。



おごせっ子広場

町内の小中学校や町の行事等に参加する子供たちを写真で紹介するコーナーです。

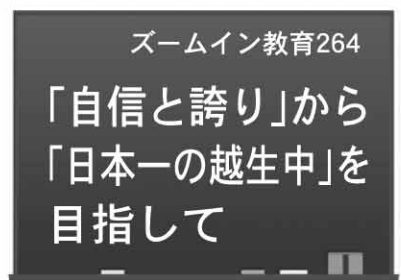
越生中学校



6月27日・28日に、今年で24回目を迎える立志発表会が行われました。3年生の堂々とした発表は、自らの進路を考えるととてもよい機会になっており、参観者からもたくさんの賛辞をいただきました。

- 今年度の取組の重点
- ①学力の向上
 - 学び合いを取り入れた授業を実践し、「主体的・対話的で、深い学び」を推進します。
 - 家庭学習の習慣化を図り、生徒が自ら進んで学ぶ力を育成します。
 - ②豊かな心の育成
 - 道徳科の授業実践を通して、

越生中学校では、学校教育目標「自立の力を育む」のもと、「越中生としての自信と誇り」「授業、部活動、行事に燃える越生中」「日本一の越生中を目指す」をスローガンに掲げ、知・徳・体の調和のとれた生徒を育成し、保護者・地域から信頼され、活力のある学校を目指しています。



越生中学校



- ③健康・体力の増進
- 体育の授業や部活動を通して、心身ともに健康な生徒の育成に努めます。
- 交通安全の指導を中心に、「自分の命は自分で守る」という意識を高めます。
- 豊かな心の充実に努めます。
- 校歌を大切にし、歌声が響き渡る学校をつくります。
- 木の香漂う校舎や空調設備、新しい体育館や武道場、給食ホールなど、県下随一の教育環境を生かし、今年も「日本一の越生中」を目指します。
- ご支援のほど、よろしくお願いたします。

越生浪漫

No. 127

越生人物往来⑤

大賀一郎博士



大賀一郎 (明治16年(1883)~昭和40年(1965)) wikipediaより

平成28年10月、東村山市の岡野行雄氏(キリスト教図書出版社)が、古代蓮「大賀ハス」で知られる植物学者の大賀一郎の寄稿が載ったガリ版刷り雑誌「山草会誌」3号(昭和25年12月)のコピーを送ってくださいました。

「越生と弘法山(其の二) 大賀一郎

次に「越生」なる文字のことであるがこれは、越生の古刹法恩寺に伝わる元久・承元以前の記録には見られない。今ヲゴセを「越生」と書く事について考えて見るに、「こ



柳田国男 (明治8年(1875)~昭和37年(1962)) wikipediaより

さ」は俚言集覧によれば「木蔭」の口であって「さ」は「せ」に通ずるから、ヲゴセは小越生(木の小蔭)又尾越生、木蔭の尾端のような口と考えられる。現に府中大神社に伝わる武蔵七党系譜によれば、「越生」は「小越」との註が手記してある。又「越」は越中、越後、越藤の如くエツ又はエと読んだり、越智、越喜来の如くヲと読んだり、又越家、越部、越田の如くコス、コシ、コセ、とも読んでいるから「越」を「ヲ」とよむのはよい。次は「生」であるが、武蔵に福生(フッサ)があり、仏家の用語に生飯(サバ)のある如く、「生」をサとよませる事もあ



塩田章 (明治43年(1910)~昭和56年(1981)) 山口眞澄氏撮影

るから、越生はヲサ、ヲセ、又コサ、コセとは通ずるけれどもヲゴセと読ませるには少しく無理がある。平安初期の和名抄には、このヲゴセが記載されていないが、之より先、元明天皇の和銅六年五月全国に対し、風土記作成の勅があり「近畿七道諸国の郡郷の名は好字を用いよ」との語があり、後延喜帝の朝(九一〇頃)には「凡諸国の郡郷の名は二字を併用し必ず嘉き名を選べ」との勅があったので、思うに初めは「小越生」又は「尾越生」であつたのが、後に上の「小」又「尾」を除いて「越生」になつたのではあるまいかと想像するのである。

こんな風に困つたものだから斯界の権威柳田国男さんに書を呈して教えを乞うたが「矢張わからぬ。徳島県人に生越という氏の人があり、それをヲゴセとよむから、この二つを比較して考えたらよからう」という意味のお返事があつた。斯く「越生」をヲゴセと読むのは権威者側でも問題であるので、私の如きものの生兵法は危険きわまるが一応口つけておき、他日の正論をまつ事とする。

尚越生町の附近を流れている越辺川(ヲツベガワ)では「越」をヲとよませている。(後略)※(其の二)掲載号は欠巻『遠野物語』『蝸牛考』などで知られる民俗学者の柳田国男は『山の神とヲゴセ』(昭和11年)に、こう記しています。「埼玉縣入間郡越生(オゴセ)町、群馬縣利根郡赤城根村生越(オゴセ)などの例は、寧ろ峯越ヲゴシの意味ではあるまいか。(後略)」

昭和24年(1949)8月、敬虔なキリスト教徒だつた大賀博士は、越生の弘法山で開催された修養会に、岡野行雄氏とともに参加しています。修養会を主催した塩田章氏は福島県白河出身で、昭和21年に越生に移住、成瀬に居宅「雀のお宿」を結び、無教会主義キリスト教の伝道師として、信仰を貫きました。社会教育家としても多くの青少年に影響を与え、また、『銀の匙』の作家中助に師事した文学者でもあつた塩田氏は、特に俳句を能くし、永く越生文壇を支えました。

※参考：鈴木龍久『中助助せんせ』岩波書店2009年／塩田章『雀のお宿のいろはかるた』越生毛呂ロータリークラブ1981年

両雄相まみえる～太田道灌と渋沢平九郎～

役場正面玄関に渋沢平九郎の等身大写真パネルを設置しました。昨年7月から本年3月まで渋沢史料館(東京都北区)で開催された「渋沢平九郎 一幕末維新、二十歳の決断」で展示されていたもので、会期終了後、館の御厚意で譲っていただきました。来庁時に、越生ゆかりの悲運の両雄を偲んでみてください。

